

学長告辞（平成 26 年度入学式）

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。教職員と在學生を代表して、心から歓迎します。別室でモニターをとおしてご覧いただいているご家族の皆様も、およろこびのことと存じます。

ここに波多野学習院長、卒業生の同窓会である桜友会の内藤会長、父母会の小堀会長をはじめ来賓の皆様のご臨席を賜わるなかで、入学式を執りおこなえますことをたいへんうれしく思います。

去年の 9 月のことです。まだ 2 学期は始まっていませんでした。私は出張でフランスのパリに滞在していました。気がかりなことがあり、早く仕事を片付けて、確認したい気持ちで一杯でした。メールや電話で確認すれば済むものを、そうしてはいけない気がしていたのです。

パリでの仕事を終えて、フランスの新幹線 TGV に乗って東へと先を急ぎました。行先はパリから数百キロ離れたアルザスです。アルザスはフランス東部にあり、ドイツと国境を接するところにあります。パリから TGV と在来線を乗り継いで 3 時間余り、アルザス地方の科尔マル駅に着きました。科尔マルは宮崎駿監督の『ハウルの動く城』のモデルとなった町です（宮崎監督が学習院大学のご出身であることは、ご存じのとおりです）。科尔マルには赤や青に塗られたカラフルな建物が立ち並んでいます。

この科尔マルから、ブドウ畑ののどかな田園風景を見ながら、車で 20 分ほど行くと、キンツハイムに着きます。キンツハイムにはヨーロッパ日本学研究所があります。実はこの研究所で学習院大学の学部学生 29 人が研修をしていたのです。法経文理の 4 学部すべてから参加し、学年も 1 年から 4 年までの混成チームです。

私が研究所に着いた時、学生は研修に出ていて不在でした。ほどなくして帰ってきたので、はやる気持ちを抑えきれず、学長室の研究スタッフに「どうだった？」と訊きました。研修のプログラムのひとつに現地の高校生に日本を紹介するプレゼンテーションがありました。気がかりだったのは、参加者数です。新学期が始まるか始まらないかの時期だったので、数人しか集まらないのではないかと心配でした。事前研修で参加者が時間をかけていねいに準備していたのを知っていたので、数人だったらがっかりするだろうなと不安だったのです。「観て下さい」。私は一眼レフデジタルカメラの液晶モニターを覗きました。そこには講堂で溢れんばかりの高校生を前に、プレゼンテーションをしている私たちの大学の学生が写っていました。聞けば現地の新聞社が取材に訪れたとのことでした。

英語とフランス語、日本語を交えてのプレゼンは大成功でした。この高校は日本語教育に熱心で、簡単な日本語ならば通じそうでした。実際には英語とフランス語でメンバーが助け合いながらプレゼンをしました。日本の高校生を知ってもらうために、学習院女子高等科出身の参加者が女子高等科の制服を着てプレゼンをする、そんな工夫もありました。プレゼンが終わっても別れがたく、つぎの授業があるのに別れを惜しんでいました。

参加者は皆、本当にびっくりしました。日本とフランスは 9000 キロ以上も離れています。言葉も文化も習慣もちがいます。それなのにこんなにも日本に関心を持ってくれて、日本のことが大好きなフランス人の若い人たちがいる。このことにびっくりしたのです。

研修プログラムはほかにもいくつかありました。ストラスブールの欧州評議会や現地に進出している日系企業を訪問し英語で質疑応答をしました。また研究所ではスチューデントアシスタントとして、国際セミナーのお手伝いをしました。事前に本格的な英語の学術論文を読み込んでおかななくてはならず、たいへんだったと思います。参加者はこれらのプログラムをみごとに成し遂げました。他方で参加者は、もっと英語を学んでおけばよかつ

た、少しでもフランス語がしゃべれたら、日本人なのに日本のことを知らなすぎる、もっと日本のことを学ぼう、日本とフランス、日本とヨーロッパの関係を学ぼう、という気持ちになりました。帰国後すぐに 2 学期が始まると、長い時間と忍耐力を必要とする外国語の学習も苦ではなくなり、受け身だった授業にも積極的に参加できるようになりました。「なぜ学ばなくてはいけないのか」がこの海外研修でよくわかったからです。

以上のアルザスの研修の話からみなさんに伝えたいことが 3 つあります。

第 1 に、大学で学ぶというのは学び合うことです。助け合って学ぶということです。みなさんはさまざまな入学試験を経て、ここにいます。一般受験、指定校推薦、学習院高等科、女子高等科からの進学など多様です。なかには第 1 希望ではなかった人もいるかもしれません。しかしここにいるみなさんは皆、対等です。優劣はありません。ひとは誰でも得意・不得意があります。得意な分野で助けて、不得意な分野で助けてもらいましょう。

第 2 に、大学では自分の頭で考え、自分の言葉で表現することが重要です。高校までの学習は唯一の「正解」にたどり着くのが目標でした。大学ではちがいます。「正解」があらかじめ決まってはいません。未解決の複雑な問題を考える。大学で学ぶとはこのことです。それには自分の頭で考え抜き、借り物ではない自分だけのオリジナルな言葉で表現しなければなりません。

第 3 に、「書を持って街に出よう」ということです。「書 = 本を持って」とは目白のキャンパスで学ぶことを指します。「街」は国内、海外の両方です。目白のキャンパスで学びつつ、国内でフィールドワークやボランティア、インターンシップに参加する、あるいは海外研修や留学にチャレンジする。みなさんのキャパスライフは充実したものになるでしょう。

学習院大学は戦後生まれの大学です。学習院大学の歴史は戦後日本の歴史と重なります。戦争に敗けて廃墟のなかから再出発した戦後日本は、短期間のうちに高度経済成長を達成し、先進国の仲間入りをしました。学習院大学も同様です。1 学年定員 320 名から出発した学習院大学は、その後、短期間のうちに、戦前から続く他の主要な大学と同等になりました。

今、日本は岐路に立っています。経済停滞の「失われた 20 年」を経て、自信を失い、極東の小さな島国に転落していくのか。それとも持続的な経済発展を前提に、成熟した先進民主主義国として、国際社会に貢献していくのか。戦後日本と歩みをともにしてきた学習院大学は、日本が成熟した先進民主主義国になることをとおして、世界に平和と安定が訪れるように、教育と研究を展開します。

戦後日本と学習院大学の発展は、血の滲むような努力の積み重ねの結果でした。今の私たちにもできるにちがいありません。みなさんひとりひとりの自己実現の努力が学習院大学、ひいては日本と世界の発展につながることを強く期待しています。

以上をもって学長告辞とします。

平成 26 年 4 月 8 日 学習院大学 学長 井上寿一